

## 月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

5-28

くどいようだが、たとえ真紀ほどの女であっても、「恋は盲目」の呪縛を解くことはできない。

アメリカの作家カート・ヴォネガットに言わせれば、「恋(人生)なんて、そんなものさー」と一笑にふすことだろう。

幾度となく真紀は、練達の恋の魔術師と浮き名を流されてきたが、現にいくつかの恋を顧みれば、前にも述べたように、店の顧客のハードボイルド作家に言わしめた喩え話。

四百字詰め原稿用紙で四十数枚の小品、チェーホフ作『可愛い女』の主人公オーレンカを文豪トルストイにして「無償の愛、夫や恋人の見解をその都度、自分に同化させ、一日として愛情なしには生きられない神にも似た女」と絶賛させた。

ここでも二大女優のメリナ・メルクーリとドリス・デイと同様に再度登場させた二大作家のアントンチェーホフとレフ・トルストイとがリンクすることになる。

無償の愛とは言わないまでも、真紀にもそれなりの自負はあつた。

主人公オーレンカのように愛した人との死に別れはなかつたけれど、後腐れのない決別はしてきたつもりだ。後に死別を経験することになるのだが.....。

曇天ゆえに漆黒の闇に浮かぶ漁火が幻想的に見えて、真紀は独り占めしている湯船と湾とが同化するイリュージョンに誘われた。

沖へ向かって泳ぎ始めた真紀の気魂は、ひりひりして制御不能に陥りそうだった。

真紀は心底から、ドライマティーニを飲みたい！と渴望していた。

ドライマティーニは、何度か出口が見えなくなった時、『こはる』へ出勤前に馴染みのバーで作ってもらったカクテルだ。ドライマティーニが開高健作『夏の闇』の一場面をも誘引した。

それにしても、記憶や想いの断片が次から次へと鎖状に連なっていく様を、真紀はどう捉えていけば良いのだろう……、横田に指摘された空想癖の所為かも……と精神の境界をかく乱させられる。

まもなく真紀は、それは独特のオーラを漂わせる横田の波長と越前町梅浦という場所のためだと気づかされた。

真紀が客室に戻ると横田は苦笑して、「溺れているんじゃないかと心配したよ。もう少しで女風呂を覗きに行っていたよ」と嫌味を言いながら、ワインクーラーから白ワインを取り出して抜栓した。